

購入文化財の概要

【彫刻】

1. もくぞうふどうみょうおうざぞう 木造不動明王坐像

1 軀

区分：重要文化財（明治34年8月2日指定，彫第778号）

種別：木造／仏像（明王）

法量：像高81.1cm

時代：平安時代

両目を見開き上牙下出する，いわゆる大師様の不動明王像で，像底の修理銘により愛宕山旧在と知られる。大振りの目鼻立ち，幅広で厚みのある体軀，著衣に刻まれる翻波式衣文などに平安前期風をとどめながら，穏やかに整えられた造形に十世紀彫刻の特色をみせる。当代の優品として名高い像である。



【工芸品】

2. ^{かたな}刀 ^{むめいでんしづ}無銘伝志津

1口

^{つきたりうちがたなこしらえ}附 ^{つか}打刀拵二口柄一点

区分：重要文化財（昭和17年6月26日旧国宝指定，工第1173号）

種別：工芸品

法量：刃長70.5cm 反り1.8cm

時代：南北朝時代

鎬造，庵棟で，元先ともに身幅が広く，重ね厚く，反りは浅い。鍛えは，板目が流れて肌立ち，全体に地沸えが細かについて白気映りがある。刃文は，先の尖る互の目と湾れを基調として，玉刃，島刃を交じえた飛焼きごろろの大乱れで，刃縁はほつれる。表裏に棒樋を搔き通す。茎は大磨上げの無銘である。

『享保名物帳』記載で，分部光嘉所持により「分部志津」と称される。徳川家康から紀州初代藩主頼宣に伝えられ，家康，頼宣所用とされるそれぞれの打刀拵えが附属する。



【書跡・典籍】

3. 醍醐山寺院本仏記 だいごさんじいんほんぶつき 元弘元年九月 廿 六日実禅書写奥書 げんこうがんねんくがつにじゅうろくにちじつぜんしょやおくがき

1 卷

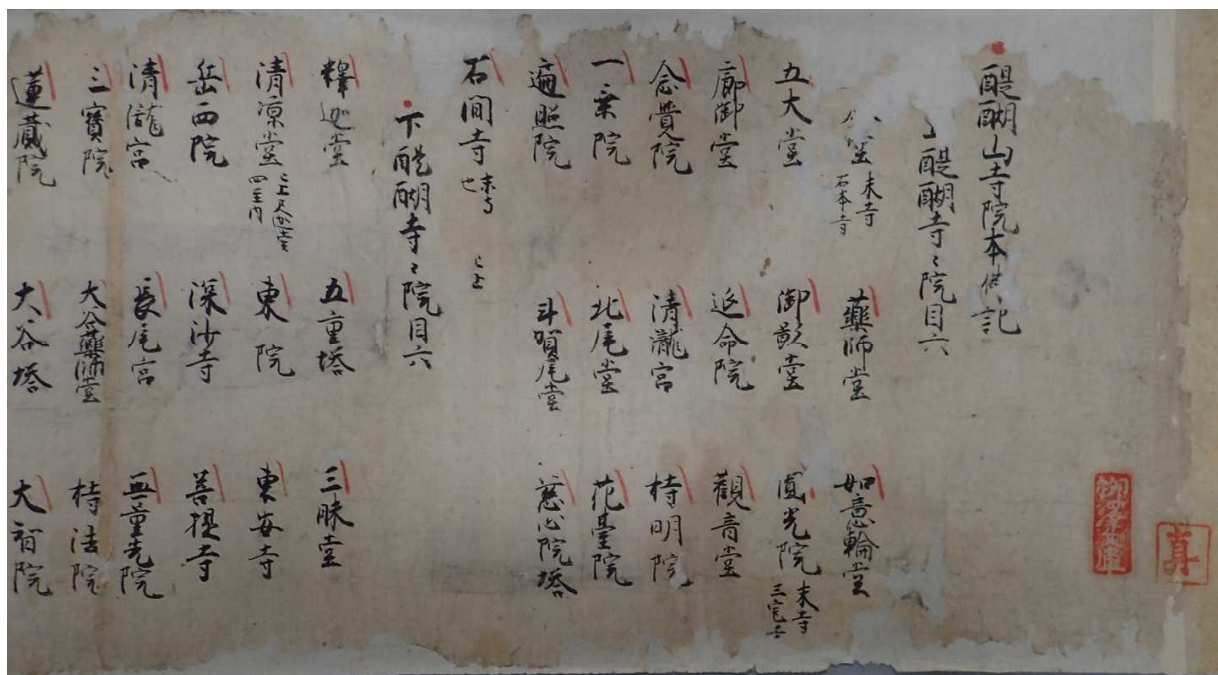
区分：重要文化財（昭和38年2月14日指定，書第2095号）

種別：書跡・典籍（和書（寺記））

法量：縦28.8cm 全長17.8m

時代：南北朝時代・元弘元年（1331）

醍醐寺の堂舎，仏像に關係する願主，由緒や庄園について記す。「醍醐雜事記」卷五までの記事とほぼ合致し，相互に深い關係のあったものと考えられる。書写奥書に「元弘元年九月廿六日 終功了，更不可及外見者也，秘藏々々 執筆沙門実禅〈春秋／廿六〉とある。鎌倉時代以前の醍醐寺の状況を知ることができる史料として貴重。



【古文書】

4. 紙本墨書阿波国板野郡田上郷延喜二年戸籍残卷

1 卷

区分：重要文化財（昭和9年1月30日指定，文第254号）

種別：古文書（国郡文書）

法量：縦27.0cm 横7.862m

時代：平安時代 延喜2年（902）

国衙が作成した古代の戸籍。田上郷は徳島県北部にあたる。徳島藩主蜂須賀氏が収集したもの。前後欠。十六紙を継ぐ。紙背には「成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌卷一」が書写されている。また、紙背継目七カ所に「阿波國板野郡田上郷延喜二年戸籍」と墨書がある。遺例の少ない古代の戸籍の一つとして貴重である。



【工芸技術資料】

5. ^{もんしゃおりきもの} 紋紗織着物 ^{たんか} 「探花」

1 点

作者：^{つちや} 土屋 ^{よしのり} 順 紀（重要無形文化財「^{もんしゃ} 紋紗」（各個認定）保持者）

制作年：平成31年（2019年）

備考：平成30・令和元年度工芸技術記録映画対象作品

紋紗は、^{もじ} 縋り織の薄く透ける紗の地に、^{しや} 平織りで地紋を織り出す絹織物の制作技法である。作者は、紋紗の技法・表現を追求する中で、素材となる絹糸や植物染料の吟味を重ね、紋紗に ^{かすり} 緋の技法を加えて調和・融合させた織物の制作に取り組み、独自の作風を確立した。

作者の得意とする表現技法は、^{たてがすり} 経 緋 糸を5段階のグラデーションに染め、更に ^{はた} 機 拵えの時に経糸を少しずつずらすことによって、色彩を暈し、奥行きや揺らぎなどの「動き」を表現することである。

作者は、光、風、水などの自然をモチーフにした淡い色使いの作品を好んで制作してきた。しかし、本作「探花」においては、植物染料のそれぞれの色の美しさをより鮮明にしようと、赤と緑、黄色と青のような捕色の組み合わせを試みて、新たな作風をみせた。経糸には、1310本の絹糸を使用している。

重要無形文化財「紋紗」保持者の作品であり、平成30・令和元年度工芸技術記録映画の対象作品である。（写真：株式会社日経映像 提供）



ながいたちゅうがた きじゃく はなまりもん
6. 長板 中形 着尺花毬文

1 点

作者：松原 定吉（重要無形文化財「長板 中形」（各個認定）保持者）

制作年：昭和30年（1955年）

法量：幅37.0cm, 長さ約12m

しなやかに風を受ける竹に紅葉の葉が散る中、菊や鉄線が描かれた毬が躍る。細く長い竹は規則正しい曲線を描き、意匠に動きを与えている。

本作は、重要無形文化財「長板中形」（各個認定）保持者、松原定吉の最晩年の作品である。作者は糊ごしらえと型付け双方の確かな技量に加え、染色までを一貫作業とすることで、防染部の多い「地白もの」を得意とした。本作においても、竹や紅葉のなす繊細な曲線や、毬の柄の細かな点描の表現に、技が遺憾なく発揮されている。

型紙は、二枚一組の追っ掛け型の型紙で、白子の職人によって彫られた。後に、定吉の息子・利男の依頼で、重要無形文化財「伊勢型紙 突彫」（各個認定）保持者・南部芳松の弟の幸雄によって、紗張りを施した一枚型に彫り替えられていることから、長板中形の文様として人気が高かったことがうかがえる。

作者は、昭和28年頃から本藍染に取り組み始める。重要無形文化財保持者認定後の昭和30年作の本作は、まさに試行錯誤のただ中で生まれたものであり、自らの技術と経験に甘んじることなく、常に挑戦を続ける作者の姿勢を表した良品である。



7. ^{みくらじま くわ}御蔵島桑と^{こだんす くわ みち}シカモアの^{もっこうげい}小箆筒「桑の道」

1 点

作者：^{すだ けんじ}須田 賢司（重要無形文化財「^{もっこうげい}木工芸」（各個認定）保持者）

制作年：平成31年（2019年）

備考：平成30・令和元年度工芸技術記録映画対象作品

本作は、御蔵島桑とフランス産のシカモアメープルを石畳文様状に配した、くの字型の小箆筒である。中央の折れた部分には作者が自ら制作した^{えび じょう}海老 錠 が施され、錠を開けて箆筒を開くと、内部には左右に2段ずつの抽斗が納められている。

木工芸では、使用する材の^{もく}杢（目やその美しさ）をどのように生かすかが重要な要素であり、本作においてもそれが一つの見どころとなっている。御蔵島桑とシカモアメープルを繋ぐ横材にはグラナディアアが用いられ、4種類の貝が^{そうがん}象嵌されている。また、抽斗箱には桐、抽斗には桜と御蔵島桑、台輪には小笠原の桑が用いられている。

本作は、確かな技術と妥協のない細やかな仕事に定評のある作者の技量を、遺憾なく発揮した作品である。対照的な2種類の材を、杢と色彩をそのまま生かした仕上げで用い、かつ多種の貝や金具を施しながらも、華やかな要素が非常に品よくまとめられている。

重要無形文化財「木工芸」保持者の作品であり、平成30・令和元年度工芸技術記録映画の対象作品である。



8. 越前鳥の子紙 越前鳥の子判

100枚

作者：越前生漉鳥の子紙保存会
(重要無形文化財「越前鳥の子紙」保持団体)

制作年：令和元年（2019年）

法量：38.8 × 53.0 cm, 8 匁

越前鳥の子紙は、福井県越前市に伝承されている手漉きの雁皮紙がんびしの総称またその製作技術である。雁皮紙はジンチョウゲ科の雁皮を原料とする紙で、かすかに黄味を帯びた色合い、滑らかで光沢のある紙肌、虫害に強く耐久性に富むという特色がある。

製作工程は、雁皮の採取に始まり、ソーダ灰等で煮る「煮熟」しやじゆく、原料の傷等を取り除く「塵取り」ちり、叩いて繊維を砕く「叩解」こうかい、漉槽すきぶねに水・紙料・トロロアオイをいれて漉く「抄造」しょうぞう、漉きあがった和紙を干す「乾燥」、厚さやむら等を見る「選別」からなる。なお本作品は2枚の紙を漉き合わせたものである。繊維の短い雁皮を均一な紙に漉きあげるには高度な技術が必要とされ、今回のように厚い紙を漉くにあたってはより高度な技術と時間を要する。

原料となる雁皮は栽培が極めて難しく、現在に至るまで基本的に自生雁皮の採取によって調達している。越前鳥の子判は、文献上に登場する越前鳥の子紙の寸法であり、古くから越前鳥の子紙の基本的な規格であったと考えられている。

重要無形文化財「越前鳥の子紙」保持団体の技術見本として、また伝承者養成事業等の参考となる優秀作品として貴重である。

9. せんふきうるしさんそくき
9. 栓拭漆三足器

1 点

作者：かい こうたろう
甲斐 幸太郎

制作年：令和元年（2019年）

備考：令和元年 第66回日本伝統工芸展 文部科学大臣賞

本作は、くりもの^{くりもの}の技法によって造形された、奥と手前で変化のある印象深い器形の作品である。

刳物は、一木を手作業で彫り、削って成形する技法であり、木工芸の技法の中でも曲線や曲面を自由に表現できるという特色を持つ。工程としては、材料を吟味し、墨付け^{すみつけ}を行い、粗く木取り^{きど}した後、内側、外側の順に器形の順に器形を作り、拭漆^{ふきうるし}の仕上げを行う。

本作は、造形を際立たせるため、比較的大人しい木目を持つ栓材を用いている。作者は近年、蘭の花、馬の背など、心惹かれる具体的な形状に着想を得た制作に取り組んでいる。本作は、蓮の形状に触発された作品であり、器奥の尖った形状は蓮の蕾を、手前の輪花状の部分は蓮の実をイメージしている。

刳物ならではの柔らかさと力強さを兼ね備えた形状は、変化に富んだものであり、太く短い三足が全体の印象を引き締めている。丁寧な刳物の仕事に裏打ちされた意欲作であり、第66回日本伝統工芸展の文部科学大臣賞にふさわしい優品である。

いろなべしまきしょうきっこうまるもようがくざら
10. 色鍋島吉祥亀甲丸模様額皿

1 点

作者：いろなべしまいまいえもんぎじゅつほぞんかい 色鍋島今右衛門技術保存会（重要無形文化財「色鍋島」保持団体）

制作年：平成28年（2016年）

法量：径39.0cm, 高7.6cm

本作は、平成28年の有田焼創業400年を記念して製作された大皿である。^{なべしまはん}鍋島藩窯の高度な技術の復元にまい進したことで知られる、11代今泉今右衛門の作品「色絵^{いろえ}亀甲桐丸紋模様鉢」から着想を得て製作された。

本作には、色鍋島はもとより、古伊万里最盛期の意匠が豊富に取り入れられている。背景には古伊万里の文様に倣った籠目文、その上に吉祥モチーフを配した丸紋が重ねられている。丸紋の中には三果文、唐松、宝袋、紗綾文、さらに口縁部にも軍配などの吉祥文が描かれた。器全面に満載された装飾モチーフ一つ一つが色鍋島の典型的な表現様式を踏まえており、伝統的な技法による精密な染付の線と色絵で華やかに描き出されている。

色鍋島の長い歴史と高度な技法を象徴するとともに、重要無形文化財「色鍋島」保持団体の技術見本として重要な作品である。



【アイヌ文化関係資料】

1 1. アイヌ文化関係民族資料

アイヌの民具資料等 計 24 件 40 点

区分：未指定

時代：18～20 世紀

個人や古美術商を通じて収集された資料群である。その中でも下記のように、アイヌ民族の世界観や交流の様子がうかがえる貴重な民具資料や航路調査図のような文書資料が含まれる。国立アイヌ民族博物館での展示だけではなく、アイヌ語・アイヌ文化の調査研究に寄与する資料と言える。

①民具資料 「近藤重蔵が収集したイナウ」

イナウとは、カムイ（神）への祈りの際に使用される祭具である。カムイへの贈り物であり、イナウ自体が守護神となる場合もある。ヤナギやミズキなどの木を削って削りかけを付けたもので、地域や対象となるカムイによって材や形状に違いがみられる。

本資料は削りかけ数本を束にしてねじり、これを十数束作っている。頭部には4か所に刻みが見られる。胴体には墨書で「今送松岸筑前 近藤重蔵守重」，「イナオ又ウトモ 東夷エトロフ嶋 蝦夷人所作」とある。これらのことから江戸時代に蝦夷地を調査した近藤重蔵がエトロフで収集し、その後「松岸」なる人物に贈ったものであることが推測される。近藤重蔵（1771－1829）は幕臣で、1798（寛政 10）年から 1802（享和 2）年の間に 4 度エトロフを訪れているため、この間に収集されたものであろうと考えられる。



近藤重蔵が収集したイナウ

②文書資料 「蝦夷図 北海汐入」

「蝦夷図 北海汐入」は、1799（寛政 11）年 7 月から 8 月にかけて、航路開発の幕命を受けた高田屋嘉兵衛によって行われたエトロフ島への航路の調査図、またはその写図と考えられる。手書、彩色、畳物。

ノツケ半島及びクナシリ島とエトロフ島、さらに両島の間に潮流を三筋（北海汐・唐太汐・西蝦夷地汐）描き、その潮流を横切るように 3 本の朱点線が描かれ、そのうちの 2 本に夷ノ舟路、宜温丸船路（高田屋嘉兵衛持ち船）と記されている。

さらに、当該史料には江戸後期のクナシリ島・エトロフ島のアイヌ語地名のほか、両島間のアイヌの人々が使っていた航路、エトロフ島のアイヌ居住地域が記されている。高田屋嘉兵衛（1769－1827）は廻船問屋で、幕府御勘定（当時）の近藤重蔵とともにクナシリ島・エトロフ島間の航路開発に尽力した。



蝦夷図 北海汐入

12. アイヌ文化関係美術資料

アイヌ風俗画等 計3件3点

区分：未指定

時代：18～19世紀

江戸時代後期から明治時代にかけて、アイヌ以外の民族により描かれたアイヌ風俗画は、アイヌの生活文化を記録した民族誌の観点から高く評価される。

「絹本著色 蝦夷弾琴図 雪好筆」の作者雪好は、生没年不詳だが、18世紀末から19世紀初め頃のものと考えられる。ござに座り、五弦琴を弾きながら唄うアイヌの男性、その傍らには煙草入れと煙管、後部には行器と柄に装飾のある杓子、腕・天目台とパスイが見られ、帯の装飾はカラフトアイヌのものに似ており、特徴を捉えていることから、民具を実際に見たものと考えられる。



蝦夷弾琴図 雪好

「紙本著色 蝦夷国風図絵 小玉貞良筆」は、宝暦年間（1751-1764）頃に松前を中心に活躍した絵師小玉貞良（1680/1682/1690～没年不詳）の作。巻末には「松前之産 竜圓斎貞良筆」の款記がある。本作は、巻頭の部分が欠損し、分断しているものの、本紙は顔料の剥落や褪色がなく、画面の状態は良い。熊送りやお目見えの場面などが、躍動感あふれる動きで色彩鮮やかに描かれる。

他に、「紙本著色 蝦夷人物屏風 早坂文嶺筆」を購入した。



紙本著色 蝦夷国風図絵